ドクター井口のつぶやき その52

# 金曜日の午後

井口昭久

アメリカで生活していた頃は金曜日の午後になると、明日からの連休に向けて浮き浮きした気分になった。職場の同僚たちは朝からのんびり過ごし、夕方になる前に早々と帰宅するのが常であった。金曜日の午後は連休の始まりであった。

帰国してから、私は金曜日の午前に桑名の病院で外来診療をすることになった。国立大学の病院長時代を除いて、その病院での週に一回の診療を休んだことはなかった。国立大学医学部では、一週間のうち一日だけは外の病院でのアルバイトが許されていた。

金曜日の午前中の外来が終わると、大学へ戻って夜まで仕事に追われる生活をするようになった。日本人には金曜日の午後は仕事をする時間である。

七十歳を過ぎると、大学での管理職から解放された。大学内での会議への出席が義務ではなくなった。週一回の講義とクリニックでの診療だけが私に課せられた業務である。

年内の講義の準備もできていた。締め切りの迫った原稿はなかった。

十二月の中旬の金曜日の午後であった。何もする予定のない自由の時間を手に入れた。豊饒な時の予感がした。

桑名の病院からそのまま自宅へ直行しても不都合は生じないが、いつもの癖で大学へ向かった。

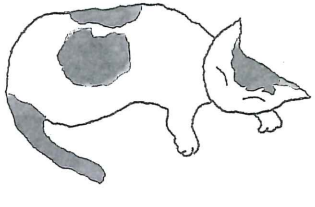
名古屋市内に入り、大学近くのデパートの駐車場に車を止めた。デパートは師走の客で賑わっていた。毎年見慣れた年末の風景であった。一階のフロアに喫茶店があった。この頃では喫茶店のことをカフェと呼ぶらしい。私はそこへ入って「自由」を「のんびり」と満喫しようと思った。

ケーキとコーヒーをカウンターで受け取り、席を探した。周囲を見渡すと思いの他多くの人がいた。ほぼ満席であった。デパートの買い物客が行き交う傍らで、そのカフェの中だけは静かであった。

大学の構内で寄り集まっている学生たちの群れと違って、ざわざわした感じはなかった。客は老年期にさしかかった女性ばかりであった。

多くは二人連れであったが一人の客も多かった。男性は私だけであった。屋内では適当な席が見当たらなかったので、カフェの外に置かれていた席に座った。デパートの売り場に繋がる傍らの通路を主婦たちがせわしなく通りすぎていた。

カフェの客は、お茶を前において所在なさそうにケーキを食べていた。



老人の客の中で、若い女子店員の紺の仕事着の白い縁取りが新鮮であった。

二人連れが口論を始めた。同じことを繰り返して言い争っていた。

私の描いていた老人の集いとは異なっていた。カフェに集う人たちは退屈そうであった。彼らは近代文明が生み出した「老人」という不自由に囲われているように見えた。

（愛知淑徳大学教授・名古屋大学名誉教授）